



第164号
 発行所 上高井教育会
 発行人 上高井教育会長
 編集人 富澤慶吉 会報編集委員 長夫 黒岩幹 印刷所 須坂新聞社

教育会の活動をふりかえって

教育会副会長 町田 徳

教育会の本年度の活動について、研究委員会から述べます。研究テーマは「子供にとって、わかり、魅力のある授業のあり方」を継続して三年、次のような研究をしました。

- 一、基礎的・基本的な内容を重視し、子どもがわかり、できた喜びの持てる授業の実践。
- 二、子どもの力をみとり、活動・つけたい力・評価の視点からの教材分析。

と、子どもに寄せた実践を指しました。四月の総委員会で中心講師筑波大学教授谷川彰英先生から「授業の発想・教師の発想・子どもの発想——問題解決学習をめぐる——」のご講演をいただき、変化化する社会の中で教師は教育における発想を転換することの重要性と本年度の研究推進について具体的なご指導がありました。

「教育会のもう一つの重要な活動である同好会に移ります。本年度も十五の同好会が結成され、延べ人数で約三百人が入会して発足しました。「教師の生命は研修である」と言

した。各委員会は組織づくりし、テーマを決めて研究活動に入りました。

谷川先生には、仁礼小学校五年算数「体積」と常盤中学校三年音楽「ある海の物語」の授業について研究テーマにそって直接ご指導をいただきました。本年度の研究内容をふまえた研究が各校とも着実に進められていました。

谷川先生から直接ご指導をいただけなかった委員会ではそれぞれ助言者をお願いし、実践を通しての研究にご指導をいただくことができました。

本年度の成果の上に来年度の研究が一層深められたことを期待します。

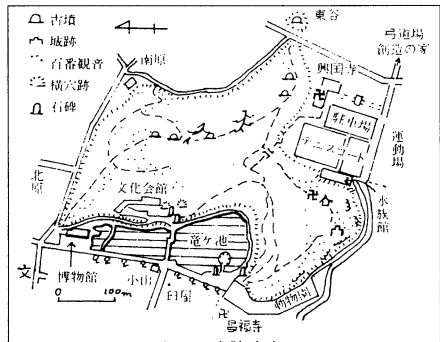
われる通り、教育者としての使命感、教科の専門的学力、子どもの成長発達を理解した上での指導力の向上を私どもは願っています。こうした願いを実践するために中央から講師を招いたり、夏休み中に夏季研修会、臨地講習会実践講習、読み合わせ等をしてきました。参加しやすく収穫の多い研修ができるよう運営に工夫がみられました。

こうした研修で得られた成果を会誌、会報を通したり、研究発表会、展覧会などによって発表できたことは同好会の活動の活性化と発展のために大変よかったです。しかし、反省として「入会者が少ない」「活動を計画して参加者が少ない」の声が世話係・会長会で出されました。

同好会の日には他の行事を計画しない、魅力ある活動等により多くの方が参加できるようにしたい。

講演会などの行事では、春の総会で会員の意見発表として「道徳教育と私」講演は須坂市出身で上越教育大学教授新井郁夫先生から「新しい学力を育てる学校改善」と題して新しい学力をつけることに豊かな体験が必要である。そのために学校教育の現状について改善点を具体例を示しながらお話をされました。

須高の山と川⑧ 臥竜山——野外歴史博物館——



臥竜山は太古からの住民のシンボルであった。

古代、尾根筋に六基の葺石古墳があり、石室や埴輪片なども確認されている。東谷側筋に連なるのは、坂田方面に生活を営んだ人々の構築か。

中世には、須田城跡と興国寺がある。城ヶ鼻ともよばれる岩鼻の頂上部は平に削られ、周囲に郭や堀り切り・堅堀がある。これらの配置から居館は昌福寺あたりと推定される。町小山は館集落で屋敷割がされ市神も残っている。

興国寺は、戦国時代のはじめ明応二年(一四九三)に上州松井田の長源寺四世天英祥貞が開山。銅鐘に「高井郡桐原莊小山郷須田村臥竜山興国寺、永正二年(一五〇五)四月」の銘があった。天英が臥竜山の命名者といえよう。

臥竜山百番観音は観世音菩薩が三三種の化身となって衆生を救うという民間信仰に基く。「三峯紀聞」によると、興国寺二十世瑞祥の発願で、牧七郎右衛門をはじめ須坂などの有力信者が寄進。天明年間、上町の桶屋平左衛門が巡礼して持ち帰った土を入れた瓶を埋めて石碑をたてたとある。西国・坂東・秩父など一八八体。明和三(四年(一七六八・七))に建立。

観音堂は、藩主四代直佑が京都清水寺にいらって懸崖造に建てた(享保三年一七一八)。現在の堂は昭和三十八年改築。近くに堀家の墓所があり、直虎公靈廟がきわだつ。

近代、須坂製糸業の隆盛とともに庶民の憩の場となった。製糸工場の運動会で工女が列をなし、料亭も開設。「わたしの心」と興国寺の山は、ほかに木(気)がない松(待つ)ばかり」と唄われた。松は約三〇〇年前興国寺の鶴山康雲和尚の植樹と伝えられる。泥岩の風化と侵蝕で根上りとなり、強い風当りでねじられた扇形樹になっている。

竜ヶ池は昭和六年恐慌下の失業対策事業で築かれた。設計は林学博士本多静六による。記念碑が滝の傍に立つ。

臥竜山は四七五M比高七〇M。長野盆地の造盆地殻運動で突出した分離丘陵。約二千万年前に海底堆積した泥岩で形成される。ウニや魚の鱗などの化石も産し、まさに野外歴史博物館。

(青木廣安)

本年度の実践をふりかえって

本年度の特活研究委員会の

活動を振り返って

竹内 修

特別活動の研究委員会では「望ましい集団活動を通し、自己を高め自己実現していく指導はどうあったらよいか」―実践力を高める活動のあり方―というテーマをこの三年間続けて掲げ研究を深めて来ている。

三年前までは、委員の数が少なく管理職の委員の先生を除くと他のほとんどの先生が小委員になるという状況であったが、二年前からお陰で二十名を超える委員が集まり、大変感謝している。

今年度は研究の課題として①実態や心情をどうとらえ、解釈するか。②一時間のなかでつける力の明確化。③学習ムードのあり方と活用のさせ方。④座席表のあり方。(何を書き、どういう場面に活用させるか。学年の発達段階に応じた使い方は)。⑤話し合い活動における教師の援助。⑥自己評価の観点の決め出しと累積。⑦話し合い活動の積み重ね。

以上七点をあげ、児童生徒の発達段階と、小中の関連を見るために小学校・中学校の両方で研究授業を実施してきた。

第一回研究会は須坂小学校四年竹組(授業者依田正良教諭)で「みんなで乗れる船を

つくる」という題材で授業が行われた。

材料となる牛乳パックがあまり集まらないので、集めていって困っていることを話し合いよりよい方法を考え合う場面を設定し授業を行った。授業では活発な話し合いができ、次の活動への意欲づけがなされた。

第二回研究会は高山中学校一年二組(授業者徳高博樹教諭)で「クラスの団結を深めるクリスマス会をつくる」という題材で行われた。

「クラスを良くしたいが自分一人の力ではできない」という芽生えが見えはじめた生徒の思いを何とかしよう、自分たちで企画運営していくクリスマス会を作り上げていくことになった。

授業は「二組の宝物になるクリスマスツリーを決定しよう」という議題で、それぞれの考えるツリーのアイデアの模型を示しながら、真剣な話し合いが交わされた。

本年度の実践から ―文学作品―

鈴木 紘一

今年度の研究は、一・二回共、文学作品の読み深める指導のあり方を探った実践だっ

この二回の研究授業を通して得られた今年度の成果を挙げる。 (1) 児童生徒にとって切実感があり意味のある話し合いとするため、目的がハッキリした活動を取り上げ、その活動のなかで話し合いを位置付けた事は良い話し合いができるもとなつた。 (2) 何のための話し合いなのか教師と児童生徒の意識に食い違いが出ないように、話し合いの目的をはっきりさせるとともに、話し合いの入り方を明確にしていく必要がある。 (3) 多数決で決める時には、決をとる前にしておくことも必要である。最終的には多数決を取らないで決めていく話し合いが話し合いを深めていくために必要である。 (4) 一人一人の深まりを見ていくために学習カードを持たせたことはよい。 最後になるが、今まで何度か研究授業を行ってきたが、どの授業者も「授業のあとクラスが変わった」という。これが特活の授業の本質ではないだろうか。教科の授業では得られない、子どもたちの本音の世界がある。(墨坂中)

|| 教育会だより ||

- 11・4 秋の講演会 於須坂市公民館、310名参加
- 演題 「金子みすゞの詩と生活」
- 講師 童話作家 矢崎徳夫先生
- ・8 臨時常任委員会
- ・15 第7回常任委員会
- ・16 第2回研究委員会(午後)
- ・22 全県研究大会、於豊野西小学校、本会参加53名、他に飯田市松尾小学校1名、丸子北中学校3名参加
- ・26 教育会中間監査(午前) 於教育会館
- ・16 第16回研究発表会(午後) 於須坂小視聴覚室、102名参加。
- ・2 第15回郡女教師研究大会、於須坂小視聴覚室、170名参加。
- ・3 第6回青年教師の集い、於信濃教育会館、本会16名参加。
- ・12 第8回代議員会、信教各種研究調査編集委員中間報告会
- ・19 臨時常任委員会
- ・22 上高井教育会報163号発行―第16回郡研究発表会・第15回郡女教師研究大会特集―
- ・10 第2回研究委員会世話係、委員長会。
- ・19 第2回同好会世話係、会長会。
- ・21 第47回県女教師研究大会、於豊科町立豊科北中学校。本会参加17名。
- ・6 第8回常任委員会。
- ・13 第9回代議員会。
- ・18 第9回常任委員会。
- ・27 第10回代議員会・委嘱委員会事業報告。
- ・28 上高井教育会報164号発行。
- ・15 上高井教育会誌第51号発刊。

の脇坂幸光先生の組では自分のとらえた考えを出し合い、悪口を言われたあと、「ガストン、さあ、すぐに帰ろう。」といった時のアナトールの気持ちを考えてみた。 授業では、人間にねずみの悪口を言われたあと、「ガストン、さあ、すぐに帰ろう。」といった時のアナトールの気持ちを考えてみた。 人間にねずみに対する見方がある。それを聞いているガストンの気持ちや考えがある。その後に「ガストン、さあ」

となる。一文を取りあげていく時も、一連の状況や気持ちの違い等があるので、その関連の中で考えさせることの大切さを学んだ。

「読むことで七割はわかる」という人がいる。大阪・授業研究会の会の山本正次先生である。読むことと音読を軸にした国語の授業を提唱・実践されている一人である。

本当に七割も理解できるのか。読めたとしても五割ぐらいではないか。いや、もっと少ないかも等と思ってしまう。ここで山本さんの授業の考えや運営の仕方を詳しく述べられないが、基本は、全文毎時間通読・一仕事が終わったら必ず読むということである。

学習する時間が進むにつれて読むことが短縮され、余った時間が増えていく。その余った時間でできることをやることになる。

「読むこと」「書き写し」「説く」「解く」「語る」といった活動が取り入れられていく方法を考えている。

自分の授業を振り返ってみると、全部ではないにしても読むことが少なく読んでいることが多くなっている。だから、読むことに抵抗のある児童は読めないまま読み深めようとしていることになる。読めない児童は内容もよくつかめない結果になっている。牧島先生の音読を取り入れた単元展開を実践する中で、音読が好きになった児童、読み取ったことを音読で表現しようとする児童が増えたということを考え合わせてみると、うなずける事である。また脇坂先生は子どもたちに、個々に自分の学習問題を追究させることを通じて自分の考えをきちんと持つことを育ててきている。それは、問題を意欲的に追究していく過程でよく文章を読んでいくこともつながって行くことである。脇坂先生の実践について郡の研究のまとめの冊子に載せたので、そちらを参照してみたい。

自分としては、ぜひ山本先生の方法から学び、読むこと自体困難な児童がどう動くか試してみたいと思った。

（旭ヶ丘小）

本年度の研究をふりかえって

岩方 節子

今年度は、昨年に引き続き、研究テーマを「児童、生徒一人ひとりが自らの健康を増進させるための具体的指導は、どうあったらよいか」性教育の授業に養護教諭としてのどのように関わっていったらよいか」をテーマに、東中学校二年二組、黒岩和男教諭、米窪あゆみ養護教諭による授業を通して、実証授業をしてみました。

また、性教育指導の流れ（体の側面）の表を、昨年から引き継ぎ、検討し、つくり直した。また、性教育指導の流れ（体の側面）の表を、昨年から引き継ぎ、検討し、つくり直した。

性教育指導の流れ（体の側面）の表については、第一回目の研究会において、全会員で、検討しました。

そうした中から、性教育は、指導者の思いや願う姿が、それぞれ違うので指導者自身の生き方や、性に対する考え方が出る授業と考えられることと。（それだけに指導者自身が必要）養護教諭が、担任や授業者へアドバイスできることが必要。養護教諭が、担任や授業者へアドバイスできることが必要。養護教諭が、担任や授業者へアドバイスできることが必要。

「独創的」も育ちほしくない。が、本校に在ってはシステム的ではないにしろ、実に「个性的」な先生の集団であり、その「個性」が触れ合って、今までにはない「何か」が創り出されているという実感である。「宝」：宝は宝であるだけに当然欠点もあり、傷もある。「完全な宝」は同時に「宝ではあり得ない。欠点や傷を愛しみつつ、また新たに自己を生きる。宝とはそういうものである。

「本校の宝」はそういう人間（教師）集団なのだと思ふ。これがきざっぽく映り、語る人は、当然のことながら「宝」を保持していない人のたわごとと思うが…。

（玉井義郎）

（常盤中）

本校の宝⑧

（旭ヶ丘小）

日野小学校

校の宝」なる表題の原稿依頼があった。依頼書を見た瞬間「宝物」でなく「宝」であることにユニークさを感じたので、「筆」というわけ。

私は本校にお世話になって二年が過ぎようとしているが、日々、先生方の発想・個性・独創性といったものに目を引かれることが度々あって、その先生方の在りように感じ入ったりもしている。

職員室での先生方の会話の多くも私の耳に入る限り、そのほとんどが子どもに関することである。私も場数だけは

いたずらに長く、多くの職員室を経験しているが、そこでの話題の多くが「子どものこと」が中心」というのは当り前のようでいて、必ずしもそうでないというのを知っている。そう感じたのは本校へ来て生き方の話題・会話の実際から過去を振りかえって改めてそう思わされた次第。

時に校舎内を歩く。廊下に習字が貼ってある。どの子の作品にも落ちがない。皆、いい字だ。しかも個性はちゃんと出ている。このクラスの先生の顔、子どもたちの顔々が浮かぶ。「ああ、オレも、こ

としては「体」についてわかっている医学的、科学的な面を補助することが一番かわりやすいと考え、今回は体のことを扱っていく上での指導の流れや、指導するとき留意したい点、用語の扱い方についてまとめていったほうがよい。しかし、生き方や思いは、指導者によっていろいろ違っていて、性教育をしていくときいつも頭の中においておくべきことは「自分らしく自立していく力をつける」ことが大切なことではないか。この立姿を育てるには、体面のことだけでは足りない。心面をもっと扱っていく必要がある。「自分らしく、自立していく」ために、男女平等

も「独創」も育ちほしくない。が、本校に在ってはシステム的ではないにしろ、実に「个性的」な先生の集団であり、その「個性」が触れ合って、今までにはない「何か」が創り出されているという実感である。「宝」：宝は宝であるだけに当然欠点もあり、傷もある。「完全な宝」は同時に「宝ではあり得ない。欠点や傷を愛しみつつ、また新たに自己を生きる。宝とはそういうものである。

「本校の宝」はそういう人間（教師）集団なのだと思ふ。これがきざっぽく映り、語る人は、当然のことながら「宝」を保持していない人のたわごとと思うが…。

（玉井義郎）

（常盤中）

性教育を学校に位置づけるには、養護教諭のふんばりが必要だと思いますが、それぞれの学校にいろいろな型の性教育の方法があるので今後その学校の良さを勉強できるような研究会や小委員会になればいいと感じています。

（常盤中）

（常盤中）



冬のひととき

新井 篤子

ある日の理科の時間、冬の生き物を探しに出かけた時だった。「先生、みつけたよ。すごい物。」Y君がニコニコしながらやってきた。「何々、すごい物?」「うん。すごい発見。こっちこっち。」と言っ

て、ザックザックと雪の中へ入って行く。ついて行ってみると、雪のない片隅に、タンポポが葉をおもいっきり広げて冬を越している姿があった。「ね。すごい発見でしょ。冬でもタンポポはあるんだよ。」そのY君の誇らしげな顔。そして、その情報を聞きつけた子供たちが次々と集まってきた。歓声をあげる。春にわた毛を飛ばしたら枯れてしまうと考えていた子供たちにこの発見は大きな驚きを与えた。

その後、次々とさまざまな子が雪の中から多くの生き物を見つけた。桜やツツジの葉、オオイヌノフグリの花、木の皮の裏で身を潜めているクモなど。冬でも、春に向けて多くの生き物が生き続けている

という大発見をし、目を輝かせながら一時間中雪の中を探し続けた。子供たちは、毎日多くの事を学び、発見している。子供たちが、本気で追究している時の姿は美しいなあといつも感じる。何でもやりたい、知りたいの意欲満々の子供たちを見てみると、このエネルギーはどこから出てくるのか羨ましく感じることもすらある。きっと純粋に物を見つめ感動し、それが夢や希望につながっていくからだろう。

そんな時、ふと我に返り、私の夢、そして目標って一体なにだろうと考えさせられる。子供の頃のように素直に答えが浮かばない。驚きの心、感動の心の大切さを子供の姿から学ばされる毎日である。今まだ二十代。教師となり、四年目。教師としての自分と女性としての自分に目標を持ち、輝きを失わずに生きていきたいと思う日々です。

紅一点のA子は、夢多き一年です。「私ね、お母さんになるの。」と言うA子は、休み時間が終わりそうになると職員室に私を迎えに来ては、全ての先生にあいさつをしていきます。A子流あいさつとは、とにかく相手の体(肩、おなか、お尻、胸など)をたたき、「みつけ。」と言うのです。就学前には言葉の面で遅れていると心配されていたA子ですが、今では「もう勉強の時間じゃないの。」と先生方のお尻をたたいて送り出す程です。

そんなA子から、私は毎日エネルギーをもらっています。「こんなおっきいの出ちゃった。」とトイレから帰って来て両手を一杯に広げた時の笑顔。二人羽織の様に、私の背中にもぐり込んで、「どこにいるか。」と聞く。嬉しい事があると「ありがとちゃん。」と言いながら、私の顔や手をなめてくる顔。給食前、「動

大きくなったら

何になる

内山まどか

我がクラスは総勢三人の精薄学級。でも子どもたちは「先生も入れて」などという言葉は当たり前のように省略し、「内山学級は四人だよ」と言うのです。先日「先生は大きくなったら何になるの。」と聞かれてしまいました。

「大丈夫? 元気を出して。」と顔をのぞき込んで励ましているA子。どんな場面でも彼女は私を正面から見据えて、純粋な心をぶつけてくるのです。今日こそは、A子からのエネルギーを一方通行ではなく、投げ返すことが出来れば、と思うのですが...

高山に赴任して

北原 健吉

一月の三連休。奥信濃では多くの積雪があり、スキー場では、スキー客であふれんばかりでした。私は、生まれが南信の伊那であり、スキーにもあまり縁がなければ、これ程の雪の多さも体験してきていません。雪かきの苦勞もせいぜい年に一度あるかないかでした。

秋は非常にすばらしい所です。雪どけと同時に芽吹く木々の淡い緑。夏の涼しさ。記録的な猛暑で、深刻な水不足が問題になっていた昨年、標高五百五十五メートルのおかげで屋間でも、須坂市内に比べれば、かなり快適でした。またこの高さの恩恵により見える夜景も、忙しさを忘れて眺めてしまふことがある程です。さらに、秋の高山は、文句をつけるところがありません。まず日本一といわれる紅葉。特に私が好きな景色は、高山大橋から見る紅葉です。また秋は実りも豊かです。リンゴ、ブドウ等の果物や、山に入れば様々な茸が、私の舌を楽ませてくれました。

すばらしいのは、自然だけではありません。私をはじめ

編集後記

本年度最終号の会報164号を「教育活動の総括」と「本年度の実践をふりかえって」のテーマでお届けいたします。この一年間の実践の積み重ねを大切にしながら、まだ足りない部分をはっきりさせ、新たな展望をもって新年度を迎えたいものです。

(西原・小山)